

福岡市環境教育・学習計画推進協議会 議事録 要旨

- 日 時：平成26年12月1日（月）15：30～17：30
■場 所：福岡市保健環境研究所2階会議室

■議事1:福岡市環境教育・学習計画(第三次)の骨子の検討について

(事務局) 資料1～3及び補足資料に基づき、第三次計画の方向性、構成案、現状・課題・役割及び行政の施策の展開について説明。

◇各委員からの主な意見

〈福岡市環境基本計画が掲げるめざすまちの姿との関わりについて〉

- ・環境基本計画の「豊かな自然と歴史に生まれ、未来へのちつなぐ」という理念を、どうすれば実現できるかをきちんとイメージしながら、議論を進めなければならない。
- ・命はとても大事。福岡市は150万人のまちで、いろいろな資源（財産）を持っていることをみんなが理解して、大事にしてもらいたい。
- ・子どもたちに個々の生物の命と種という命の意味を理解させ、行動に移していくための教育ができるような学校の役割が重要。
- ・現在の20代、30代の若者を中心に、自分に自信のない人たちが多く、生きている実感を持っていない人が多い分、自分以外のものに対する命への関心が薄くなっている。多様なつながりをいろいろな場面で作っていくことが大事。
- ・「いのち」には、いろいろな意味があるが、まずは自分たちが受けている恵みを感じるころからスタートすると分かりやすいのではないか。

〈各主体の役割と行政の施策の展開について〉

○共通

- ・市民団体は団体、地域組織は地域と、各主体を役割で切り分けているが、どんな組織でも、広がりを持っていても一向に構わないので、自由度を持たせたい。
- ・どの活動も、最後は福岡市環境基本計画の目指す方向性につながるようにしないといけない。

○市民について

- ・自分の生活とつながるような形での情報提供が必要。
- ・環境面で一番困っているのは若者対策。簡単に地域ともつながらない。
- ・福岡市は「大学が多い」と言われているが、活動している大学生は少ない。若者というエネルギー、体力を奉仕してくれる人材を活用すべき。北九州市立大学のように、地域活動に取り組む大学生をいかに増やすかも大事な視点。
- ・環境活動に参加できるチャンスがあることを知らない大学生が多い。活動に参加して、自分が成長していく姿が見られれば、若者もやりがいを感じて1歩、2歩と上がっていくので、それを大人が支える必要がある。
- ・外国人には、日本の実態を見せて、自分の国との違いを意識させると良い。
- ・「転入者、外国人、若年層」という書き方は、整理したほうがよい。
- ・若者も外国人と同じように、コミュニケーションを取りづらい人が増えている。また、特定のテーマに人が集まり、公共的な情報にふれることが少なくなっている。
- ・対象ごとに、特に何をしなければならないかを明確にすべき。転入者、外国人、若者は、同列に並べる話ではない。
- ・福岡市の優れた環境や技術を広げていく積極的な話があってもよい。

○市民団体について

- ・環境教育を企画できる人材確保に苦労している。

- ・市民団体として学校の環境教育に関わる場合、技術を伝えることはできるが、先生が共感しないと子どもたちにも伝わらない。
- ・市民団体に限らず、環境教育の指導者は、ある程度のスキルを身に付ける必要がある。その基準があると分かりやすい。
- ・日本野鳥の会では、毎月6カ所で探鳥会を実施しており、案内人に対する研修会で、鳥だけでなく足下の環境も考えるように伝えている。

○地域組織について

- ・おやじの会は、それぞれが同等な立場で意見を交わせる集団。おやじの会のように自由な小集団がたくさんあると良い。

○学校について

- ・将来を担う子どもたちのベースをつくるという意味で学校の役割は大きい。幼稚園も学校という主体の中に含めるべき。その際、「いのちをつなぐ」というキーワードは重要。
- ・大人の環境マインドを育てる時にも命という要素を考えていく。「点」を「線」にして、「線」を「面」にして、福岡市全体として、1つの「命」というキーワードでまとめていくことが大事。
- ・子どもたちにしっかりと正しい知識を教えていくことと、子どもたちの実践力につなげていくことが大事。道徳教育には自分に関する事、友達に関する事、命に関する事、地域や社会に関する事という4つの項目があり、心の教育として重要。
- ・何が正しくて、どう説明するのかということについては、その分野の専門家が言われることがわかりやすく正確なので、集めて活用するとよい。

○事業者について

- ・エネルギー多消費型都市である福岡市で、市民に対して節電や環境にやさしい発電に関する情報を、いかに発信していくかが重要。
- ・九州電力(株)では、幼稚園児の母親に対する「エコマザー制度」(水力発電所、地熱発電所などの見学)、小学生に対する「エネルギー授業」(模型による電気のつくり方の紹介)、「九州ふるさとの森づくり」(ボランティアによる環境保全活動)など世代層別、地域別の環境保全活動を展開している。
- ・イオン九州(株)では、「イオンチアーズクラブ」(こどもエコクラブ活動への支援)、「幸せの黄色いレシートキャンペーン」(レシート投函金額1%のボランティア団体等への贈呈と店頭での活動紹介)などに取り組んでいる。

○行政について

- ・環境局だけでなく、各局が関係することについては、それぞれの局にも方針をきちんと伝えて、市全体として矛盾しないようにする必要がある。
- ・教育委員会としては、全教育課程の中で環境の視点を踏まえた学習をいかに横断的に、系統的に行っていくかはとても大事になる。環境教育を、学校全体で計画的にするよう指導は行っている。

○骨子案のイメージについて

- ・骨子案のイメージの中に環境基本計画の4つの分野をどのように取り込んでいくのかが少し見えずらい。各主体の取組が、全体として4つの分野の強化につながるのかどうかを検証しておく必要がある。
- ・「ESDなどの考え方をふまえる」とあるが、どう踏まえるのか。
- ・「環境・社会・経済のバランスを考え」とあるが、どう考えるのか。
- ・市の計画の「共働」と国の法律などの「協働」は同じなのか、確認しておいてほしい。

■議事2:まもる一む福岡の再構築について(報告)

(事務局) 資料5に基づき、まもる一む福岡のハード、ソフト、事業の改善案を報告。

◇各委員からの主な意見

〈改善のためのアイデア〉

- ・今の事務局案では、NPO交流活動ブースでの交流は起きないだろう。
- ・対象は、「生物多様性の保全又は健康と環境の安全・安心に関して興味のある人」となっているが、漠然としており、メインターゲットは絶対設定したほうが良い。例えば、展示物を作成するにも、その人をイメージして作成・構成していくことになる。小学校高学年がメインで良いのではないか。
- ・体験学習だけの施設では、予約制や決められた時間になるので、たまたま立ち寄った人は何も見ることができない。うまく情報を定期的に更新して、展示するスペースは設けたほうが良い。
- ・単に解説するのではなく、興味を持たせて体験してもらおうという意味でのインタープリターが必要。
- ・新科学館とまもる一む福岡の改装の役割分担、つなぎをどうするか。
- ・これまで使われなかった原因がどこにあり、どう改善したら宝の持ち腐れにならずに、市民や子どもたちに、「未来へのちつなぐまち」にどうつながっていくのかをはっきりと打ち出すことが必要。
- ・大学教員が高校に模擬授業に行く際には、この先生はこんな話ができるというリストがある。説明できる内容やその時間などのメニューがいくつもあれば、特別授業で行こうという学校も出てくるのではないか。
- ・いのちのたび博物館では、3名の教員が指導主事として入っており、プログラムを作って授業をしている。子どもたちと「つなぐ」という意味では、学校職員、小学校あるいは中学校教諭が入って教える、プログラムに関しては任せるようなシステムになると、随分違うのではないか。
- ・「まもる一む福岡はこのような施設」という特徴があると使いやすく、魅力ある施設になる。
- ・リニューアルをきっかけに学校等にアピールし、長期休暇(夏休み、冬休み、春休み)の期間には、楽しいと思える実験イベントを実施するなど、行ってみようと思わせる施設にしてほしい。
- ・展示館をつくる際には、「人」、「もの」、「場所」、「時間軸」の4つを考えている。「人」は、人気のある人を呼んで人を集める。「もの」は、シンボリックなものを見せる。「場所」は、場所のコラボレーションを考える。「時間軸」は、「3年1展示」として、2～3年をターゲットに中期計画を立てて、シンボリックなものを変えていく。
- ・教育委員会が、活動そのもののPRと学校現場との連携の仲介役にならないといけない。教育センターで研修等しているので、そこと連携を取ると先生たちへのアピールになる。
- ・「まもる一む福岡」という名称は変えないのか。知的な施設として人を集めるならば、名称は非常に重要。

■事務連絡

(事務局) 次回の協議会は3月下旬に開催する予定であることを連絡。

■閉会